

深イ〜話!

No.2

週刊朝日の編集長であった扇谷正造氏の「諸君！名刺^{めいし}で仕事をするな」にガンの権威の先生のエピソードが紹介されていました。

その先生は寒い季節になると、ポケットにカイロを入れておいて、いつも右手を入れていそうです。それは、なぜか・・・？

この先生が勤務する病院は近代的だが、ひとたび中に入ると沈痛な雰囲気^{しんとうな}に満ちている。多くの外来患者は、ガンになにかしらの関わりがあったり、疑い^{うたが}があつて来ているわけで、生死に関わる緊張感が病院内をおおっているのである。

そのような患者を診察する場合、先生は極めてゆったりとした声で、「どれどれ、どこが悪いんですか。どれ、脈を」といって、右手をポケットから取り出して脈を診るのです。カイロで温められた右手で脈を取られると、緊張感に張りつめていた患者さんの気持ちがスーと静まり、楽になっていくんだそうです。

物理的に温かい、冷たいということもあるだろうが、それ以上に先生の気持ちや思いやりが伝わり、患者は安心するのではないのでしょうか・・・。

そうした信頼感が本当に大切なのだと思います。



「名医と凡医の違いはここにあると思った」と扇谷氏は締めくくっている。